

「つくくんねど通せんぼっし」

(ひとつくれないと通せんぼ)

秋が深くなると日脚が早い。宿場町の辺に草の実がはぜる頃になると、外宿(とじゆく)、中宿(なかじゆく)、上宿の子らに一つの楽しみがわいてくる。

「そろそろ上総みかんが来る頃だよな」

東金、成東方面が古来、上総柑橘類(温州・ふくれ・しらわみかん)の産地である。馬の背に一駄・一駄半(一駄は俵にして二俵)と馬子らに牽かれてやってくる。お小遣錢もおやつもろくにももらえない悪童らの恰好の食べ物である。

昔の城下町の道路は、防戦上直線、直角にできている。

「そらっ、馬がきた、かくれろ」

誰いうとなしに東の角から見えはじめた荷駄の馬子らに見つかからないように、溝の両側に散って息をこらす。数名、数十名の悪童らの目が光っている。四、五メートル幅の道路を横切って荒縄がビクッと動く。

ウンチがびっしり塗ってある縄である。

十余りの荷駄みかんが近づくと、西側の溝から荒縄をピンと引張って、「ワアー」と跳びだす。

「つくくんねど通せんぼっし」

「つくくんねど通せんぼっし」

口々に言いながら荒縄を上下して道をふさぐ。

「ワツラ(お前ら)しょうねえ餓鬼らだよ」

と言いながら、俵のみかんを取り出し投げていく。どの馬子のひげづらも笑っていたという。

拾う、投げるの、ほんのひととき過ぎると、子倅らは、

「ヤツラ(野郎ら)、もういいにしべえやよ」と声をかけ合って、近くの家のうらでクシヤクシヤ。

「うめえなあ」

「うん、うめえなあ」

成東線、成田線が開通するまで、当地の浜宿河岸(かし)に、荷駄が通っていたころの、たあいのない世俗の一端である。